通訳案内士試験攻略法

2001年の設立以来、多数の通訳案内士試験合格者を輩出しているCEL英語ソリューションズ。設立者で最高教育責任者の江口裕之先生に、通訳案内士試験攻略法をうかがった。

執筆：江口 裕之（えぐち・ひろゆき）

国立北九州高専化学工学科卒業後、プロのミュージシャンとして全国で演奏活動を展開。その後、通訳・翻訳家として活躍。1989年から一貫して通訳案内士の育成に携わる。2001年1月、東京に英語学校のCEL英語ソリューションズを設立。現在、最高教育責任者。2009～'13年、NHK教育テレビ『トラッドジャパン』講師。著書に『新・英語で語る日本事情』（Dan Dumas共著／The Japan Times）、『日本まるごと英単語帳』（NHK出版）など。

一般に第1次試験が最難関と言われ、多くの受験生は手始めに第1次試験に特化した学習を行いがちだが、実は通訳案内士試験で最も重要なのは第2次試験である。1次はあくまでも2次受験者を選考するのが目的で、受験者の真の実力は第2次試験で問われることになる。

第2次試験では、第1次試験で学んだすべての知識を口述によって説明する能力が求められている。そのため、受験対策としては、筆記4科目と口述を別個に考えるのではなく、筆記4科目の受験準備の段階において、学んだ内容を口頭で説明する練習を同時に進めていくのが最も効率が良く、また効果も高い。

また2次試験では、試験官に対する態度（表情・作法・積極性・心構え）も含めた、ガイドとしての総合的な資質の評価も含まれている。受験者の心構えとしては、現場で活躍できる通訳案内士としての総合的な人間力を磨くのが、受験プロセスの核心であることを意識しておいていただきたい。

1. 第1次筆記試験（英語）

日本関係の英文を読む習慣を身に付けることが大切。身近なものでは、対訳付きの日本文化紹介書籍や、英字新聞の日本文化関連記事などを多読すると、語彙力・文法力を磨けるとともに日本文化の知識も深まるので一挙両得である。

英文読解問題　近年、マークシート問題には並べ替えが必出しており、配点も高い。英文読解中、構文が難解と思われる部分を見つけたら、大学入試レベルの文法参考書を用いてしっかり理解しておこう。英文和訳に関しては、対訳付きの日本文化紹介書籍を使って訳の練習をすると、背景知識も得られて効果的である。

英作文問題　対訳付きの日本文化紹介書籍を使って訳の練習をするのが最も効果的。CD付きの書籍の場合、音声に合わせて発声練習をしておくと、自然な表現が身に付き、課題英作文の理想的な対策となるだけでなく、第2次試験対策にも効果的である。

ガイド用語　15問中、10問程度は特別な準備をしなくても解けるが、難易度の高い5問程度が差が付く部分であるし、第2次試験で必須の知識ともなるため、専門の単語帳や辞典などを用い、日英の表現や発想の違いなどを日頃から確認しておくといいだろう。

2. 日本語による筆記試験

近年、難易度が高くなっている。しかし、合格ラインは6割と低めに設定してあるうえ、すべてがマークシート形式なので、いずれの科目も、基本知識とその応用によって正解できる問題だけで合格点が取れるように作成してあるところが巧みである。つまり、極端な難問にとらわれず、各分野の基本を押さえることが最重要で、その基本を活用する柔軟な発想を磨くことが合格のカギとなる。

日本地理　基本知識は中学地理程度で十分。高校受験参考書や問題集で、日本の気候と地勢、地図の見方、各都道府県の情報を習得する。加えて、観光地などが詳しい写真付きの地図帳を使って、国立公園・国定公園を中心に、山・山脈、半島、湾、島、河川、海峡、灘、平野、温泉地などの名称・所在地を確認する。そのほか、世界遺産、文化的景観、重要伝統的建造物群保存地区などをウェブ検索で調べておこう。

日本歴史　高校日本史Bの教科書・参考書で全体を学ぶ必要がある。その中でも政治・文化・外交を重点的にチェックしておこう。地図問題対応として、政治的事件については、その発生した場所も確認しておくこと。また、写真問題が例年出題されているため、写真を多数掲載した図説参考書を使い、庭園、建物、絵画、仏像などの文化財に関して、作成者、所在地、時代などの関連知識をチェックしておこう。

一般常識　カバーする範囲が極めて広いため、ある程度の割り切りが必要になる。まずは、公民という基本分野だが、中学レベルの参考書で2～3割程度がカバーできるはずなので、それ以上は手を広げないほうが効率的だろう。政治・経済・産業に関しては、新聞にまめに目を通すのが一番の対策で、訪日外国人数、GDP、為替、株価、年度などの数値、政治家・文化人の名前、国際会合や国際組織名とその目的など、近年話題になった項目をメモしておく。これで3割程度カバーできる。問題の1割は伝統や行事など日本文化に関するものなので、他の試験科目を学習すれば全体で合格ラインの6割を達成できるはず。

3. 第2次口述試験（英語）

会話力は時間をかけてじっくり伸ばすべき項目であり、第1次試験終了後、ましてや、結果発表後の付け焼き刃的練習では不十分。第1次試験の準備段階から、学んだ知識を積極的に英語で発話する習慣を身に付けるのが重要である。

通訳パート　対訳付き日本文化紹介書籍を使って、60～80字程度の適当な日本文を音読し、それを英語に訳す練習をする。和文の音読を自分でICレコーダーなどに録音して練習することもできる。また、CD付きの書籍の場合、50語前後の英文を聴いてメモを取り、そのメモを参考に英語を再現する練習も効果的。

プレゼンテーション・パート　対訳付き日本文化紹介書籍に巻末索引がある場合、その索引をトピックとして1分程度の説明を展開する練習を積む。2分のプレゼンテーションは、この1分バージョンを2つ組み合わせるものだと解釈すればよい。例えば、「日本の宗教について」という場合、神道・仏教についてそれぞれ1分程度が基本で、それにまとめが加わる形になる。プレゼンテーションの後の質疑応答もこれら1分の小ネタを多数準備することで対応できるようになる。